

特集

# 外から 佐賀を 眺めたら

佐賀に世界のファンタジスタが降臨。7月、サッカー界でその名を轟かせる元イタリア代表のFWデル・ピエロ選手を擁するシドニーFCとサガン鳥栖による国際親善試合が行われた。デル・ピエロ選手はサッカー教室のほか、焼き物の絵付けを体験したりと佐賀を満喫した。



**デル**・ピエロ選手はイタリアのトレヴィーゾ県コネリアーノ出身の38歳。93-94シーズンにセリエAの名門ユヴェントスでデビュー。95-96シーズン、イタリア代表の至宝ロベルト・バジジョ選手からレギュラーポジションを奪い背番号10を引き継ぐ。98年、膝の大けがをして不調に陥るが、01-02シーズンにリーグ16得点をあげて完全復活。セリエA優勝6回。UEFAチャンピオンズリーグとセリエAの得点王に輝くなど大活躍した。イタリア代表としてはバジジョ選手と並ぶ歴代4位タイの通算27得点。2006年ドイツW杯の優勝メンバーでもある。昨年からオーストラリアのAリーグ・シドニーFCで活躍している。

ゴール前左45度から数々の名シュートを決めており、そのエリアは「デル・ピエロ・ゾーン」と呼ばれている。また年少時より日本の文化に興味があり、新日本プロレスリングやアニメ「ルパン三世」が大好き。親日家として知られており、昨年行われた「東日本大震災復興支援2012 Jリーグスペシャルマッチ」にゲストプレーヤーとして参加。自ら参加を申し出たという。

## 佐賀牛おいしい!!

来日直後の7月22日には鳥栖市のベストアメニティスタジアムで小学生150人にサッカーを指導。ミニゲームなどで約1時間、交流し、参加者全員にサインをプレゼントした。翌日は佐賀市の県陸上競技場での練習後、同市内のホテルで行われた前夜祭に参加。サガンドリームスの竹原稔社長が「サガン鳥栖にとって初の国際親善試合。新しい歴史の第一歩となる。5年後、10年後のことを考え鳥栖市や佐賀県だけでなく、日本に大きな力を与えるきっかけとしたい」と挨拶。続いてシドニーFCとサガン鳥栖の全選手、スタッフが入場。両チームを代表してデル・ピエロ選手と藤田直之主将が花束を交換した後、古川康・佐賀県知事が前半は英語、後半は日本語で歓迎した。

続いて尹晶煥監督が日韓W杯で韓国がイタリアに勝ったことに絡め「サガンドリームスの社長が、イタリアは未だに韓国に悪い感情を持っていると言っている。サッカーは世界中の人を楽しませるスポーツ。親善試合は子どもに夢や希望を与えるゲームにしよう」とエール。デル・ピエロ選手は「確かに日韓W杯はイタリアにとって悪い思い出だが、悪い感情はない。き

# 佐賀はとても良い印象

と社長がわざと監督を怒らせて試合に勝たせようとしたのだろう」と切り返す。「来日して以来、あらゆるところで温かく歓迎してもらい感謝している。明日の試合はプレーヤーも楽しめるようなプレーができることを祈っている」と締めた。スピーチの後は、両チームの代表による鏡割り。デル・ピエロ選手も木槌を手に法被を羽織る。無事に成功した後は、もちろん日本酒で乾杯!!

リラックスマードのデル・ピエロ選手にモテモテさ

がが直撃インタビューを敢行。デル・ピエロ選手は「佐賀にはとても良い印象を持っている。佐賀牛はものすごく美味しい!練習場でもスタジアムでもたくさんの人に温かく受け入れられた。サッカー教室も本当に楽しかった。子どもたちのエネルギーを受け取ることができて本当に嬉しい」とコメントしてくれた。

## 光る名手の技

いよいよ国際親善試合。ベアスタには1万5千人のファンが詰めかけた。デル・ピエロ選手は先発で出場した。オーストラリアのAリーグはまだシーズン開幕前。シドニーFCはこの日本遠征が新チーム始動ということでもまだまだ本来の動きではなかった。しかし、そこは稀代のファンタジスタ。前半35分、左サイドでボールを持つと、味方に絶妙なヒールパス。スタンドが大きくどよめく。後半10分には巧みなキープから波状攻撃を演出。実力を見せつけた。後半31分に途中交代。スタジアムのサポーターからスタンディングオベーションが送られた。

試合は前半2分、ゴール正面からのFKをMF水沼宏太選手が直接決めて鳥栖が先制。シドニーのDFグランドにミドルシュートを決められ同点とされたが、前半40分に右サイドのMF清武功暉選手のクロスの水沼がヘディングで合わせて2-1で鳥栖が勝利した。

試合後、デル・ピエロ選手は「素晴らしいスタジアムと多くのお客さんの前でプレーできたことは本当に嬉しい。ボールに触れるたびに大きな歓声が聞こえてきた。日本は、帰ってくる場所というイメージ。いつも嬉しい気持ちになる。サガン鳥栖はチーム全体が組織的に準備できていた。チーム全体が良い動きをしていた。何人かの選手が際立っていたが、それも組織をイメージしてプレーしていたからだろう。今でもサッカーを始めたときと同じ気持ちでプレーしている。今の時点では今季に集中しているが、その先は何も決めていない。日本にプレーするという気持ちがないわけではない。12月に改めて考えたい」とコメントした。

尹監督は「徹底した自己管理を行い、サッカーに対する情熱を持ち続けている。コンディションは万全でなくても献身的に動いていた。さすが名選手だ」と印象を語った。



2011年に春秋航空による定期チャーター便の運航が開始されて以来、グッと身近になった中国・上海。この街で働いている佐賀県に縁のある人が集まる「上海佐賀県人会」でメンバーにインタバニューした。

上海佐賀県人会は2000年ごろに活動を開始。2カ月に1回会食しているが、当初の出席者はわずか4、5人だったという。2004年ごろから少しずつメンバーが増え交流の輪も広がった。この日は過去最高の45人が参加。笑い

の絶えない賑やかな雰囲気溢れた。メンバーの職種は多種多様。社員のほかにも、学校の先生や、中国人と結婚した人もいる。佐賀出身者だけではなく、両親が佐賀人でも入会できる。男女比は8対2くらいという。

## まだまだ認知度低い

会長の上海ヤクルト有限公司工場長・岸川政晴さんは神埼市千代田町出身で今年還暦。地元の高校を卒業後、ヤクルトに入社。佐賀工場に10年、香港で6年働き、佐賀に戻った後、茨城、熊本などを経て1年半前に上海に来た。「香港と基本的には同じなのですが、交通ルールには驚きました。青信号で横断歩道を渡っていても、バイクが来る。電動バイクだから音があまりないので危ない。

車の右折はいつでも可能だから、横断歩道を歩くときにも安心してはダメ。最初の半分は右折車、後半は対面に気を付けなくてははいけません。こういう世界があるものかとびっくりしました」と語る。佐賀県人会について「方言で話せるのが、本当に嬉しい。どきやん、こぎやん、そぎやん。会の際は佐賀弁が飛び交います。上海において佐賀の認知度はまだまだ低い。福岡、長崎、熊本、鹿児島の名前は出てきても、佐賀の名前はなかなか出てきません」。

# 上海佐賀県人会 45人が交歓



上海ヤクルト有限公司工場長  
岸川政晴さん



プロシップ上海  
山口法弘さん



セイカン総合エンジニアリング  
江頭利将さん

## 佐賀の誇り胸に邁進



プロシップ上海総経理の山口法弘さんは神埼町出身の36歳。佐賀商業高校では野球部所属。2年生のとき3番サードで出場した夏の甲子園では優勝。関東学院大学に進学後、大手企業向けの会計関連システムを開発するプロシップに入社。今年4月に上海で現地法人を立ち上げた。ビジネスの世界で活躍する山口さんの「背骨」を作ったのは佐賀での高校時代だ。「甲子園で優勝するチームにいた3年間で学んだことが今の自分を支えています。きついことが多かったですが、より高い技術を身につけよう、良い組織を目指そうという、成果を出す組織のマインドと文化は、大学、社会人になっても生きていくと感じます」。

県人会に入ったのは会社関係の知人の紹介。「上海に来て驚いたのは暑さ。7月中旬から真夏は連日40度を超えます。42〜3度くらいあるんじゃないですか。高校を卒業して10数年、佐賀を外から見

続けている。「力はあるのに出していないような印象を受けます、控えめな感じですね。うまく言えないですが、良い形で変化していくことも必要だと思えます。若いときは考えなかったですが、30代になって、佐賀に役立つことができなかつたか、と思いはじめました。やっぱり自分が生まれ育ったところですから」。

## 貴重な佐賀生まれ

めるセイカン総合エンジニアリング総経理の江頭利将さんのスピーチが始まった。「佐賀には希少価値があります。日本の人口1億3千万人に対し佐賀県は85万人。佐賀に生まれる確率はすごく低い。生まれただけで貴重です。英語にもsagaという単語がある。伝説という意味です。世界でサガ出身という、非常に通りが良い。自虐的ではなく、誇りを持って生きていきましょう!」。会場からは大きな拍手。それにしても、佐賀以外で会う佐賀人はどうしてこんなにパワフルなんだろう...



「生」

まれ育った街アマーストは大西洋に面した小さな町。干満の差が大きくて、太良の海にすぐく似てます」。アンドリュー・チャップマンさん(48)はカナダ東部出身。6人姉弟の末っ子だったチャップマンさんは理科が好きで、な少年だった。高校を卒業して、エレクトロニクスの専門学校に進み、コンピューターを修理する会社で働く。その後、経済学

市街地にもっと緑を

に興味を持ち大学へ入学。指導教官の専門はアジア。次第に興味を持つ。「いろんな書籍で勉強しましたが、本物に触れたくなって。中国や韓国に比べると、日本の方が暮らしやすいというイメージがありました」。1995年、日本で英語を教える仕事を得て、来日する。実はこれが初めての海外旅行だった。乗り継ぎの空港で、大勢の日本人団体に驚きながら、飛

行機は関西国際空港へ。陸路で初任地の佐賀へ着いた。初めて住む外国。いろんな違いに驚いた。「びっくりしたのは道が狭いこと。自転車専用と違って、たら、向こうから自動車が行って来る。一方通行なんだと理解したら、反対からも車が。日本人は器用だな、と感心しました。また、当時、タバコとお酒を自販機で売っていて驚きました。カナダでは身分証明がない

と買えません」。食事でも苦労したという。「小さいときに食べて体調を崩して以来、お米が苦手でした。最初はファミレスのハンバーグや、ドーナツなどを食べていたんですが、来日3カ月後の健診で体重が激減しているのが判明しました。それから反省して、お米を食べるようになって、今では大好物です」。来日当時、日本語は挨拶ぐらいしかできず、英語の文法もこちらに来てから勉強したという。「佐賀の人は優しく、真面目な人が多いですね。会社の同僚はよく手伝ってくれたし、生徒さんの中には病院を抜け出してレッスンを受けていた人もいます」。来日から2年、チャップマンさんは佐賀の女性と結婚する。「最初は5年間ここで暮らして、その後、カナダへ行くかどうか決めようとしていたんですが、多分、このまま佐賀に住み続けると思っています」。年に数回ある地域の川掃除も、もちろん参加する。「めんどくさいとみんな思っているんですけど、近所の方とのコミュニケーションの場になります。お金に頼らず、自分の地域を守るのには良いことですね。今では近所の人だけではなく、子どもや猫まで、よく知っています」。

「佐賀は私にとっては大らかな街。カナダの方が本当に何も無い。車で少しドライブすると脊振や七山など自然にあふれた場所もある」と語る。逆に少し不満に思うのは、市街地に緑が少ないこと。「カナダでは道路沿いに樹齢50〜100年の木が植えてあり、生活に潤いを与えてくれます。佐賀は都会を目指すのではなく、もっと身近に緑が溢れる楽しく生活できる街にしたいと思っています。新しい施設をつくるより、元々あるものを大事にしてほしいですね」。

気にかかるのは教育のこと。「中学校に入ったらず、どこの高校に行くか決めなくてはいいけません。もっとゆっくり将来を考える時間を与えたほうが良いと思います。もっとリラックスして生活できたら良いのに」。



アンドリュー・チャップマンさん(48) カナダ出身

「中学校に入ったらず、どこの高校に行くか決めなくてはいいけません。もっとゆっくり将来を考える時間を与えたほうが良いと思います。もっとリラックスして生活できたら良いのに」。

講座 information  
アンドリューのはじめての英会話  
◇毎週金曜 ◇10:00~11:30  
アンドリューのゆっくり英会話  
◇毎週月曜 ◇19:00~20:30  
詳しくはP112~のエスプリをご覧ください

最

初に住んだのが佐賀だったから日本の印象が良かったと思います。都会は韓国でも同じ。日本らしさを感じられる佐賀に住んでいて良かったなと思います。家族もたまに遊びに来ますが、同じ意見です。都貞喜さん(31)は韓国第3の都市である人口250万人の大邱広域市の出身。韓国南部に位置し、繊維業や眼鏡などの小工業が盛んな大都会だ。

都さんは佐賀大学で有機化学の博士号を取得、現在は非常勤研究員として学生生活を送っている。「大邱大学の修士課程で指導を受けた先生が、佐大の先生と交流があり、佐大の博士課程に行ってみないか、と勧められました。最初は関心が薄かったんですが、ずっと地元だったので、それ以外の所で勉強したいという気持ちが強くなって。親戚に日本語を勉強している人もいて、日本には親しみを感じていました。基礎化学は日本の方が発展していることもあり、留学を決定しました」。

「佐賀の第一印象はすごく良かったです。奈良のように伝統的な街並みではないですが、福岡と比べて日本らしい雰囲気があり落ち着きます。何より空気がきれいなんです」。一番好きな場所は佐賀城のお堀端。「日本的な風景が好きですね。たまに散歩したり、楽しんでます」。

都貞喜さん(31) 韓国出身



佐賀城本丸歴史館の縁側もお気に入りの場所。腰を掛けて庭を眺めると和の文化を堪能できます」。

所属する佐賀大学での研究生活も韓国と大きく違う。「韓国では先生の指示が明確で、周りを見ながら研究する感じでした。日本では、自分が取り組みたい内容に打ち込める半面、責任を負う。自由であるがゆえの厳しさもあります」。食べ物やお酒も違う。驚いたのは揚げ物

の多さだ。「韓国ではあまり食べなかつたし、脂っぽくて苦手でした。でも、こちらに来て食べてみると美味しい。ちょっと太ってしまいました。ビールは日本の方が美味しいです。韓国のものは薄い感じがします」。

日本語が流暢な都さんだが、佐賀で身に付けたという。「所属している研究室は留学生が多く、英語でコミュニケーションがとれました。でも大学から一歩出たら、日本語ができないと

生活できない。日本人学生に言葉の意味を何度も聞いたり、TVを見て覚えたり。半年くらいは聞きとれるようになりました。今では英語より得意ですよ」と笑う。

佐賀で困ったのはバスの本数が少ないこと。「佐大周辺でも1時間に1本くらい。最終の時間も早く、福岡の天神で遊んでいても早めに帰らないと家にたどり着けません。韓国では路線バスでデパートするのが一般的で、目的地を決

めずに、気になった場所で途中下車して楽しみます。もっとバスの本数が多かったら、そんなこともできるのに」。

研究生生活の一方、3年前から佐賀新聞文化センターで韓国語の講師を務めている。「年齢を重ねていても新しい挑戦をする人が多いので、自分自身を愛しているんだな、と感じます。私もそういう風になんか生きていけたらいいですね。佐賀の人は余裕を持っていて、と感じます。他人の話をよく聞いてくれるし、表情が柔らかい。自分は今でも笑顔ではいられないタイプなので」。

「佐賀の若者から、佐賀は何もなくて面白くない、という意見を聞きます。私はそういう考えに反対です。佐賀は研究に集中するのにちょうど良い環境です。地震も少なく生活費も安く住みやすい。取り組むことが明確にある人には良い街です」。

目標へ集中しやすい街